

477

特245

694

昭和維新は精神維新から

松本介山述

2



0001614000

0001614-000

特245-694

昭和維新は精神維新から

松本介山・述

日本精神宣揚団出版部

昭和9

AAC

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第67条の規定に基づき、平成12年3月23日付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。

特245
694

皇大命を御中に

清く 優しく 強く

偕に食ひ 偕に働さ 偕に樂み

天地拓きて 宮柱太敷立無窮に伸び

各自々のミコト果たさな

國の子桃太郎

神道を興隆し國基を培ふ
皇道を振作し四海を生む
人道を開拓し混沌を整ふ

目次

一、緒言

國民大衆反省せよ……………(一)

日本主義者再省せよ……………(三)

昭和維新の本義とその目標を知れ……………(五)

二、人間惡、社會惡の根本を検討して日本精神認識資料とせよ……………(一〇)

三、宗教道德、外來思想に超越し日本精神を把握せよ……………(一六)

四、皇國の大使命に目醒めて日本人的人生觀を確立せよ……………(一七)

五、皇國日本肇國の本源を窮めよ……………(三三)

六、純眞清明神氣其のまゝの日本人的國家觀……………(三〇)

七、天佑を祈りてこの難關を突破せよ……………(三四)

八、結言……………(三七)

昭和維新は精神維新から

緒言

國民大衆反省せよ

(一)

今日の日本は、文字通りに千古未曾有の超非常時代であつて、最早日本は如何にして改革さるべきかといふ思索時代も亦言論を戦わす時代も過ぎ去つて、只一路改革への実践躬行時代である。

滿洲事變、五、一五事件を契機として、國家機構革新の機運は澎湃として漲り、現下の國情は恰も憤火口上に在る如く、極めて不安に、極めて焦燥に、秩序も統一もなく紛争の儘に革新への軌道を暴進してゐる。

國家機構の革新は内外の情勢に對應する必然的日本の要求である。即ち皇國日本の國体の要求であり使命である。而しながら此使命を貫徹するに吾々國民相互にその準備があるか、その心構へがあるであらう？ 現下の國情は遺憾ながらこれを否定する他はない。

例へば、思想的に觀て神ながらなる日本精神を把持する人々は雨夜の星の如き有様であり、大方の國民個々人の思想は、朦朧としてはゐるが、個人主義、利己主義、自由主義、民主主義、社會主義、共產主義、或は國民社會主義、國家社會主義等々々稱へられてゐる如く、全く皇國意識に背反する幾多の思想形態を數へられてゐる。

換言すればその容姿風貌は日本人には相違ない、然しながらその思想はアングロサクソン思想であ

り、猶太思想であり、支那思想であり、印度思想であり、露西亞思想である等々々、全く皇國日本の國體に背反する多岐多端なる異國思想の集合場であるのが、日本現在の實狀である。

皇國日本の悩みはこゝにあり、國家墮落の原因はこゝに胚胎されてゐる。

(二)

日本國家機構の建て直しは、焦眉の急を要することは勿論である。然しながら天壤無窮の皇室を奉載し、萬世一系の天皇を御中として、大家族主義國家を形成してゐる世界無比の光輝ある我が皇國の建て直しは、國情が如何に改革の急を要する場合であらうとも、斯くの如き諸々の異國思想を抱懐する國民大衆を擁し、無比判的に歐米諸外國に模倣して經濟機構の建て直しのみを主眼とし、其の目的を貫徹せんとするが如きは再思三省を要する重大問題である。

斯く言へば皇道精神に理解なき人々は、吾人をして恰も現支配階級の擁護者の如く、或は保守的頑迷固陋の日本主義の如く誤解するかも知れぬが、吾人は現代の如き唯物史觀に立てる歐米的個人主義利己主義、自由主義民主主義の現支配階級を擁護し、或は非國家的資本主義機構の日本に満足してゐる者ではない。財閥政黨特權階級の非國家的思想と其の行爲が、國民大衆の共同生活を阻害し皇國の前途に幾多の暗影を投げてゐる如く、亦この反面には無自覺なる國民大衆が、これに附和追従して共同の罪惡を犯してゐる事も見遁すことは出来ない事實である。

而してその病毒は遂に國家機構に浸潤して、こゝに革新の要を痛感せしめられてゐるのである。故に吾人は現支配階級の思想とその行爲とを排撃すると共に、國民大衆の朦朧たる、個人主義、利己主義、反皇國思想をも排撃し、肅正しなければ昭和維新の意義はなさないと思ふのである。

(三)

農村の疲弊困憊、中商工業者の破産倒産、數百萬の失業洪水、生活苦に喘ぐ數百萬の同胞、これを

因とする自殺、殺人、詐欺横領、窃盜強盜、脅迫恐喝等々々破廉恥罪の激増、恰も妖雲低迷して百鬼横行する阿鼻叫喚地獄さながらの日本に満足してゐる者ではない。

この苦々しき、嘆はかしき現狀を打破して、名實共に伴ふ大家族主義生活體に、秩序節制ある、須賀々々として朗かなる神ながらの皇國日本を建設したいと冀ふのである。

形ばかりの日本が建て直されても、其の國家を結成する國民個々人の思想が、現代の如く多岐多端であり、國體に背反する有様では、砂上の樓閣何時かは又崩壊されることを予想せなければならぬ。

こゝに顧みて吾々國民同胞は、來るべき昭和維新を樹立する前の基礎工作として、各自々に精神維新を確立せなければならぬ。即ち自己自身に皇國意識に目醒めねばならぬ。この統一されたる意識形態の上に、新日本國家は建設されなければならぬと主張するのである。

日本主義者再省せよ

(一)

今や國家革新の機運は、燎原の火の如くに國民大衆の心底に延燃しつつある。社會主義共產主義等國體に背反する邪惡思想に惑溺せる人々に就いては、こゝに論駁するの余裕はないが、日本主義、皇道主義等主張する人々の中に、動ともすると過激なる直接行動に依りても其の目的を貫徹せんとする傾向を生じた事は、誠に歎げかたしき事象である。

徳川氏末期時代に於ける如く、對外的國情が逼迫して、而も天皇の大權は臣下がこれを冒瀆してゐるが如き、國體侵迫、皇國存亡危急の場合は、國家革新の爲めには、或は直接行動を以て其の目的を貫徹する事も亦己むを得ざる處とせなければならぬ。

然しながら日本現在の國情は、封建時代と其の趣を異にして、天皇は名實共に日本國土臣民の上に光

臨し遊ばされ、國家一切の大權は天皇に歸し奉り、御聖勅の發動する處如何なる變革も直ちに遂行されなければならぬといふ、實に尊ぶべき有難き國體となつてゐるのである。

勿論對外的日本四圍の情勢は益々逼迫して世界第二次大戰の火蓋は、何時開かれざることも知れざる極めて急迫したる現情である。亦國內的に觀ても歐米の資本主義の壓迫は、益々甚だしく、貧富の懸隔は深刻を加へ、生活苦に喘ぐ無辜の民は至る處に充滿して、而も國民精神は問ふは更らなり、政界に官界に宗教界に至るまで、腐敗墮落其の極に達して、最早、彌縫的改革では到底名實共に伴ふ皇國日本の建て直しは不可能とされるのである。

だからと云ひて、こゝに直接行動に依りて根本的に革新せんとする事は、再思三省を要する重大問題である。

最早血盟團、五一五事件、神兵隊事件等によりて天啓は下されてゐる、是れ以上に直接行動に出でむとする事は慎むべきことであり、亦假令その行爲が愛國精神に基き、公憤に立脚せるものと雖も、深遠なる國體本義の上よりこれを觀れば、同族流血の悲惨事を繰り返すことは、畏れ多くも大御心に悖るのみならず、國民各階層の和親を益々阻害し、鬭争意織を刺戟して愛國精神は支離滅裂とならむとも計られぬのである。

かくの如くにしては、何を以て外敵に對抗し得るや、古今東西の歴史は、戰敗の原因は外敵に非ずして國內的協同精神の不一致に基因してゐる事を示してゐる。故に愛國者同志諸君は、衷心より皇國の興隆を念願し、亦下層國民大衆の生活苦に同情し、これを救済せんと欲するならば、忍び難きを忍びて過激なる革新の思念を抑壓して、言辭に行動に輕舉を慎しみ責任を省みて國體の本義を明徴し、之れに基きて皇國施設百般の具體案を建て、上御一人の御親裁を仰ぎて國家改革の實を擧げむことを祈るのである。

(一)

畏れ多くも明治天皇、明治元年三月十四日、御發布の詔勅に『我國未曾有ノ變革ヲ爲サントシ、朕躬ヲ以テ衆ニ先ジ、天地神命ニ誓ヒ、大ニ斯國是ヲ定メ、萬民保全ノ道ヲ立ントス、衆亦此旨趣ニ基キ協心努力セヨ』と詔はせられてゐる如く、我皇國の建て直しは、天皇の絶對大權である。故に天皇の御聖勅の下る處に従ひて、吾々國民は如何なる國家機構の大變革をも、絶對これに服從して協力一致、其の御聖業を扶翼し奉らねばならぬのである。

故に賢明なる愛國者同志諸君は、心を此處に致して國體の本義に明徴し、國家大革新の案を建て、地位階級の如何を問はずに有識者諸賢と融和協力して其の目的を貫徹しなければならぬ。

腐敗墮落極りなき現世相に憤慨し、且つ對外的皇國の危急存亡を杞憂し、至誠の進ばしるところ捨石を覺悟して皇國の革新を成就せんと志すは、その人こそ純正無垢なる皇國の臣民である。我が國家の現狀はかくの如き人々の簇出を期待してゐるのである。

然しその熱烈たる革新の志操を自己の胸底深く抑壓して、忍び難きを忍び、穩健着實歩武堂々と、一步は一步より踏み固めてその目的に向つて邁進せなければならぬ。

今日の日本が一朝にして腐敗墮落したのではない、亦今日の日本が一朝にして世界の一等國に列するを得たものでもない、國家一切の消長は過去に於てその原因を醸されてゐるのである。

茲に改めて皇國日本の國體を、再び省察すると共に、日本精神を確立して、これを基調とし、日本内外の情勢に透徹して、而して國民精神統一の基礎の上に、昭和維新の樹立を仰ぐべく、天地神明に誓ひて行動する事が、先覺者同志諸賢の執るべき最善の道たることを、敢て菲才を願す懃へる次第である。

昭和維新の本義とその目標を知れ

(一)

明治維新は畏れ多くも我が天皇が、「すめらみこと」として名實共に日本國土臣民の上に君臨遊ばされた曠古の御大業であらせられた。

來るべき昭和維新は、我等國民の維新である。我等國民が、「おほみたから」として、「ミコト」の意識に自覺して、神ながらなる皇國の大義を把握し、之れを實踐の上に躬行すべき事業である。國民が國民として名實共に日本國土に更生し、天皇を扶翼し奉りて、大義を世界に布かんとする事業である。

(二)

由來日本は、最太古の、大昔の御祖先の始めより、御祖先の直系尊族を、天皇「すめらみこと」と仰ぎ奉りて、我が日本民族の御中心として、その下に吾々臣民の祖先は、「おほみたから」として奉仕し、大家族主義生活體の中に、秩序節制を守り、御皇祖と我々臣民の使命である「修理固成」の大事業を完成すべく努力を盡して、歳毎に文明を進め、歳毎に子孫を榮えて、この間幾千年、幾万年の歲月を重ねて、漸く今日の如き、世界無比の光輝ある國體を建設したのである。

されども太古の昔から、他民族との交通が始つて以來、多岐多端なる關係は、思想に生活に益々複雑を加へ歴史に屢々繰り返し傳へられてゐる如く、建國の本義に悖るべき、苦々しき歎げかわしき事象を惹起して、畏れ多くも天皇には只名ばかりの天皇として奉り上げ、その實政權は權勢の逞ましき臣民の手に掌握され、太古の昔に營まれし清き正しき美しき大家族主義生活體は崩壊され、群雄は割據して皇道は影を没し、覇權の爭奪の爲めには骨肉相喰み、兄弟檀に鬪ぐの愚を繰り返して、徳川氏末期に至るまで、この苦々しき不敬極る、この歎げかわしき慘虐行爲が經續されたのである。

(三)

畏れ多くも明治天皇、明治元年三月十四日億兆安撫國威宣布の御聖勅の一節に、『竊ニ考ルニ中葉

朝政衰ヘテヨリ武家權ヲ專ラニシ、表ハ朝廷ヲ推尊シテ、實ハ敬シテ是ヲ遠ケ、億兆ノ父母トシテ總テ赤子ノ情ヲ知ルコト能ハザル様計リナシ、遂ニ億兆ノ君タルモ唯名ノミニ成リ果テ、其レガ爲メニ今日ノ朝廷ノ尊重ハ古ニ倍セシガ如クニテ、朝威ハ倍々衰ヘ、上下相離ル、コト霄壤ノ如シ』と詔勅遊された如く、古代支那印度等諸外國に交通するに至りて、其の文物に思想に學ぶ處は多かりしが、その反面には外來の惡思想に浸潤して、遂に皇國の本義を忘却し、神代ながらの醇風美俗、大家族主義國體精神は崩壊され、畏れ多くも天皇は唯名ばかりの天皇となし奉り弱肉強喰、覇權の爭奪に余念なかりし事は、見逃されざる事實であつた。

然るに明治維新の大業は完成されて、畏れ多くも天皇は、最太古の昔に吾々日本民族の祖先等が「すめらみこと」として崇戴せし如く、名實共にその大權は天皇に歸し奉りて、日本國土臣民の上に、その稜威はいと新らしく、いと清らかに君臨し遊ばされたのである。

即ち明治維新は我が天皇が名實共に「すめらみこと」として日本國土臣民の上に君臨遊ばされ賜ふた天皇御一方の御維新であり、皇國日本國體機構の維新であつた事をこゝに改めて省察奉るべきである。

(四)

昭和維新は吾々臣民の精神維新である。我等臣民の父兄は明治初年に於て、天皇の御維新に従ひて日本國土に大家族主義皇國の臣民として、思想的に、經濟的に更生せなければならぬのであつたが、千數百年間佛教思想、儒教思想、或は基督教思想等外來思想に感溺して神ながらなる皇國魂を没却し、國事は一部の志士國土等勤皇の人々に任せ、明治維新の紛争は恰も彼岸の火事の如くに、心得て、自己安逸私利私慾を貪ることのみに専念して、更らに皇國の大義を顧みず、加ふるに明治以來輸入されし、歐米の文物思想に憧憬し、眩惑されて、皇國の臣民たる自己の本質をも忘却して仕舞つたのである。

日本今日の行き詰りは、世界的思想混亂、經濟不況に原因する處もあるが、その根本原因は、明治初年に於て國民大衆が、皇國の臣民たる自己の本質に自覺せざりしに基因し、出發されてゐるのである。若し明治初年に於て、畏れ多くも天皇の御維新に際し、共に吾々の父兄が、思想的に經濟的に名實共に日本國土に、皇國の御民として更生し、政治に經濟に産業に教育に宗教に、皇國の國是に則する大革新を斷行して、秩序節制ある大家族主義國體を建設したならば、如何に世界の文物思想が輸入されても、國家國民の爲めには、思想上生活上の糧としてこれを咀嚼し吸収して、以て皇國を擧げて巍然として世界に冠たる繁榮を齎らしてゐたであらう。

即ち昭和維新は、明治維新に於て斷行し得ざりし吾々國民大衆の維新である。この維新こそは皇祖天照大神の御仁慈深き御思召であり、神の命令である。皇國日本の世界的大飛躍を爲さんとする前の準備工作であり、國體の必然的要求である。

(五)

こゝに省みて吾等國民大衆は、皇國の臣民たる自己の本質に自覺して、大家族主義國家の一成員たる自己の天職に忠實に盡すと共に社會上に於ても自己の家庭に於けるが如く、親愛なる父子兄弟、老幼男女の秩序を守り、信義禮讓の美風を顯彰し、社會生活上に於ける相互の扶養の義務を果して、天皇の赤子に唯一人の飢へる者、唯一人の疾病に苦惱する者、唯一人の異端者を無からしむといふ目的を以て、昭和維新樹立の爲めに邁進せなければならぬ。

現代の如く自己自身の思想行爲を批判し反省することなくして、徒らに財閥政黨特權階級の腐敗墮落を難詰し、或は資本主義の重壓に憤慨しても、それは唯階級闘争を助長し、國家を益々混亂に陥れ、得る處は破廉耻罪の激増と國威の失墜のみである、假りに今一步を譲つて現支配階級を打倒してこゝに新日本を建設したとしても、國民大衆の思想が、現在の如く唯物的であり、享樂的であり、優越慾

的であり、全く皇國精神に背反する多岐多端なる異國魂であつては、ソヴェイトロシア程の建設も不可能である。

現代國民思想の趨向から推測すれば、明治維新に功績ありし志士國土の子孫が、特權階級となり財閥となつてその一部が今日腐敗墮落してゐる如く、又昭和維新に功績のある者の子孫が、無自覺なる國民大衆の阿諛迎合によりて、その賢明を蔽はれ、遂に腐敗墮落して國家は再び維新を繰返さねばならぬ時代が來ることは、火を見るよりも瞭かである。

故に何は措きても昭和維新の基調は、日本現在の腐敗墮落の根本原因である、アングロサクソン魂、猶太魂、印度魂、支那魂、露西亞魂等々の異國魂を、皇國魂に歸一し統一せしめなければならぬと主張するのである。

(六)

吾々日本人の血脈の中には、世界の他の民族に視られざる愛國の魂が包藏されてゐる。對外的に一旦緩急ある場合は、自己の一切を打忘れ、奮然猛然として君國の爲めに一命も砂礫の如く放擲するといふ、實に世界人に不可解とされる愛國の魂を包藏してゐる。

而して、この反面には、平時國內に於ける對個人的關係は、恰も營利を目的として移住したる殖民地の如くに、私利私慾の追求するまゝに、義理も人情も無視して、互ひに競争し紛争して、權利は主張するも義務は更らに顧みずといふ有様である。

この美しき愛國の心と、この秩序節制なき見苦しき心との矛盾を匡して、一君萬民の皇道精神に更生する事が、來るべき昭和維新建設の前の、吾々國民大衆に命せられてゐる精神維新である。

即ち皇國に盡くす真心を以て、國民個々人に真心を盡さねばならぬ。各自々に真心を盡し合はんとなれば、各自々の生活を改めねばならぬ。こゝに精神と生活を融和一致させる爲めに、國家的

に經濟機構の建直しの必要が生れるのである。

即ち昭和維新は、國民大衆吾々の維新であり、吾等國民が皇國の御民としての、精神維新が第一義であつて、經濟維新は第二義的に必然的に遂行されなければならぬと主張するのである。

二、人間惡、社會惡の根本を檢討して日本精神認識の資料とせよ

今や日本も世界も、思想に經濟に行き詰りて、この混沌より黎明へ向はんとしてもがき苦しむつゝある。唯物史觀に立てる現代人の前には、最早宗教も道徳もその光は蔽れて飽くなき享樂と優越を追ふ、個人主義、利己主義、自由主義の前には、何等の力をも發揮することは不可能となつてゐるのである。

日本人的即ち皇道精神的思索なき人々は、資本主義社會に代へるに社會主義社會を建設して、この混沌を整へんと志すに至つた。

然しそれは、耳を覆ふて鈴を盗むが如くであつて、自己の魂の究極を衝くならば、快樂を追求する所には社會主義社會の建設も、亦當然崩壊されなければならぬ原因を發見し得るであらう。

科學の力は、人間が理想する天國と極樂との燦爛たる世界を、形の上へのみ地上に現出した、而して人々はこれに憧憬し、これに眩惑されて、精神上に物質上に地獄の世界に喘ぎ苦しむつゝある。

この神と惡魔との交錯したる矛盾の中に、如何にして吾々は生活して行かなければならぬか、この問題に解結を與へる前に、吾人は先づ人間たるものゝ根本的研究から出發して見たいと思ふ。

「體吾々人間なるものは、どうして生れて來た？その原因結果目的を知り度い」
自然科學は、人間生成の原因について、物理學的に生物學的に種々學說もあるが、生命生成の原因は未だ確然として居らぬから斷定は下されぬが、先づ（もの）といふ或ものを假定して、この（も

の）と（もの）との二つのものが、結合分解の作用を重複した結果によりて、生命體は生成され、この生命の原體が進化して、原始動物より今日の人間にまで進化發達して來たのであるといふ説がある。即ち科學に於ては、人間生成の原因は未だ觀念的假定的範疇を出ては居らないが、その理論は整然として結果と合致してゐる。然しながら人間は何の目的を以て生成したのか或は生成されたのか、その理由説明はない。科學に於ては人間は大自然の創造するまゝに慢然として生成され、進化された一動物に他ならないのである。

キリスト教は、神界に常住する者が、神の禁する罪惡を犯したから、この地上に降された、即ち神は土を以て人間の形を造り、これに生命を吹き込みて先ずアダムを造り、而してそのあばら骨三本を以て次にイヴを造つた女には妊娠の苦痛を科し、男には勞働の苦しみを科した、故に人間は悔ひ改めてその罪を償ひ再び、天國の樂園に生れ更らねばならぬといふ目的がある。

即ちキリスト教に於ては、人間生成の原因は非科學的であり其の人生觀は罪惡であり苦惱であるが、その目的は明確に示されてゐる。

佛敎には人間生成の原因に對する説明はない、然し乍ら生滅流轉諸行無常の娑婆に生存する自己人生の行途に伴ふ苦惱と迷夢を克服して、眞如現相の哲理に體達し、涅槃の境地に即身成佛して、衆生を濟度し、滅しては眞如の法界に涅槃靜寂する事を目的としてゐる。

即ち佛敎では、漫然としての生存上に於ける苦惱と寂漠とを信仰の力によりて克服し、人間の本質に正覺して、情熱の迷夢から醒めて虚偽の生活を改め、宇宙の眞理に則する生活に還りて、而して他人をして自己と同じからしめ、死しては眞如の世界に生れ更るといふ目的がある。

儒敎にも人間生成の原因は更に説明されては居らない、然し乍支那の學問は、大宇宙を太極として

これを一とし、その活動「靜動」を二として、天地陰陽に分け、二は三を造り、三は萬有の始めであるといふ推論を立て、ある。故に人間は萬有と共に生成化育された處の一生類であり、即ち宇宙即我の生靈であり、我は萬物の靈長であると達觀してゐる。

儒教に於ては人間は天命を知りて、修身濟家治國平天下人事を盡くして、死も亦樂しむと云ふ悟道に入る事を目的としてゐる。

叙上を通觀し検討するに、自然科学の生命觀の基礎は觀念的であり、假定的である、が人間生成の原因を明確に示してゐる。而して辨証的に論理的に一切の萬有と共に進化の道程を明示し、人間生命構成の要素とその維持要素とは説明し盡くされてゐる、然し乍ら吾人人間相互に一貫せる生命適用の價値及び其の目的は極めて低級であり、抽象的であつて、人類相互の幸福を齎らすものでない。

即ち食慾色慾等の本能は、人間生存上の目的であり、快樂の飽くなき追求は下等なる人間の慾求であつて、高尚なる人間に一貫せる人生最高の目的價値とは、全然相反するものである。

科學的世界觀に於ては、吾々人間は萬有と共に大自然の創造するまゝに、慢然として生成され、進化したのである。而して我々人間はその産みの親たる自然に抗爭し、自然を征服し開拓して、吾人の生活と優越感とを満さんと努めてゐるのである。故に科學的倫理説は人生の目的價値を快樂としてゐるから、人類社會の實生活と矛盾し、その理想を實現せんとすれば、勢ひ社會主義、共產主義社會を建設して、個人生活と社會生活を合理化せねばならぬといふ結論に到達するのである。

故に科學の發達は人間の智識を啓發するも、人間生成の原因及び其の結果に目的使命がないから、その天性の情意を研磨し鍛鍊するには幾何の貢獻する處はなく、遂に人間の狡智は發達して情操は卑劣となり、社會道義は頹廢して個人と個人との優劣競争は熾烈となり延いては國家と國家民族と民族との競争を益々尖鋭化するに至つたのである。

(二)

自然科学に於ける如く、人生に一貫せる至崇至高の使命なき所の人間は、獸と何等相違する處はない。唯單に生んとする生命の慾求は、食慾と色慾と自己を保護せんとする欲求であり、それは動物の總べてが持つ處の、欲求と何等の相異もない、然し人間は他動物よりも聊か智情意に優れてゐる事は認められる、然しそれは智に情意に優秀であるといふのみにて、これによつて動物の範疇を超越してゐると稱する事は出来ぬ。

故に獸類的人間は、その本能を満足させん爲めに、その全智能を行使して、遂に他動物を征服した。而してその欲求の飽くなき追求を命するまゝに従ひて、自己の優美なる天性は抑壓され、情操は下劣して、狡智は益々英敏に動き、遂に人間は人間を搾取して自己の享樂と優越とを満足せしめんと努力するに至つた。

即ち自己人生に使命なき人間は、遂に快樂を以て人生の目的價値と誤信するに至つたのである。この自己人生に使命なき心、飽くなき享樂と優越とを追求する心、この心が個人主義の本體であり、利己主義であり、即ち資本主義の母體であり、社會惡の根本原因であり、惡魔の本體である。

全世界の、思想的、經濟的紛糾混亂も、人類個々人の包藏する、この個人主義、利己主義が根本原因であり、我が皇國日本の思想國難、經濟國難を招致してゐる所以も、國民個々人の使命なき個人主義、利己主義惡思想の感染が、根本原因である。

即ち純眞清明、神氣廣大無邊、維神皇國日本魂を把持せざる、獸類的人間社會の實狀はかくの如く哀れなる有様である。

今や全世界は、妖雲低迷して百鬼横行してゐる。然しそれは神に反抗して飽くなき享樂と優越とを追求する人々の心の中より、造り出されてゐる惡魔の禍ひであり、吾人日本人も國民相互の心の中に

て造り出されてゐる、この悪魔の爲めに、不安焦燥の重壓せる空氣の中に生活してゐるのである。

(三)

釋迦も孔子もキリストもソクラテスも、この自己の胸中に潜在する、この悪魔を克服して、大聖人になつたのである。大詩人ゲーテも、「この悪魔と抗争して遂に大成の域に到達したと思ふのである。而しながら彼等の門下の大部分は、師の教を遵奉し、これを實踐する事を躊躇して、自己と妥協し社會と妥協し、悪魔の手下として甘んじて來たのである、故に宗教發生して最早三千年、然れども地上は精神的には幾何も進歩しては居らない。

佛教に儒教にキリスト教に、その他の宗教に、皆それ／＼に目的使命がある。然しそれはこの沒義道の惡世界に闘争して、敗北したる人々の自己人生の行路に横はる、苦惱と悲哀と寂漠さによりて、求められる慰安所の役目しか勤めては居らない。それは心身壯健にして獸的慾望旺盛なる人間社會の實生活を淨化し、聖化し匡救するの力ある最善の教へではないからである。

叙上の如く、至崇至高の使命なき人類が、辿つて來た道は、個人主義、利己主義、資本主義、惡思想に對立して、極少數の眞人間が、宗教に道德にその立場々々から抗争して來た位のものである。

然し乍ら科學文明の現代は、宗教も道德も悪魔の前に完全に征服されて、その殘骸を止めてゐるに過ぎない有様である。

(四)

社會主義はこの使命なき人類社會、享樂と優越を追求して生存競争に終始する悪魔の社會、個人主義、利己主義、資本主義社會の桎梏の下に、懊惱煩悶の果て、遂にその智と情意とを融和して優美なる社會を建設せんとして生れたのである。

然しそれは智と情意との妥協であつて生命ではない、眞の生命は生きとし生る者の生きんが爲めの

生命ではなくして、使命のある處に眞の生命はあるのである。

使命なき所の智と情意との妥協は、利益を目的として組織された株式會社か、若しくは團體の利益を目的とする既成政黨と何等撰ぶところはない。今一步を譲つて、若しその社會を結成する個々人が、その智に情意に、體力に、平等に近きものであつたならば、社會主義社會は使命なき人類の共同生活の爲めには現在よりも幸福であらう。

然るに不幸にして社會主義の窮極の理想郷は、個々人の倫理化に俟たねばその實現は不可能とする如く、百年千年の將來と雖も、甚だ覺束ない状態である。

社會主義を遵奉し、社會主義者として自任する人々が、眞摯に眞劍に、自己を解剖し検討するならば、資本主義の原因である個人主義利己主義の殘照を自己の心底に發見するであらう、飽くなき享樂と優越を追ふ處には社會主義社會の理想的建設は不可能であらねばならぬ。若し、一沫の利己的功利的思想の潜在するとせば、それは資本主義の根本思想と何等の變りはない。唯形ちの上の社會主義社會を建設しても、それは砂上の樓閣に等しく何時かは崩壊する秋が來る。

社會主義が自己と妥協する時は、露西亞の如き、霸道的國家の建設となる。それは社會主義國家といふものではなくして、資本主義國家の變形である。財閥特權階級に反抗して自己がこれに代らんとする資本主義思想の假面であつて、純正なる社會主義國家といふ事は出來ない。斯くの如き形の上のみ建設されたる社會主義社會の後に來るものは、平和ではなくして、權力者と被權力者との、絶え間なき闘争であらねばならぬ。

吾人はこゝに省みて、歐米的資本主義を排撃すると共に、社會主義、共產主義も斷乎排撃せねばならぬ、我國體に反する惡思想であるといふばかりでなく、人類社會に適合する最善のものでないからである。唯物觀に立ち自己を本位として、自己を基調として、その集團生活體の中に、平和を得んと

思惟する人々の中からは、人類社會を救済する絶對的眞理は發見されぬものである。

二、宗教道德、外來思想に超越して日本精神を把握せよ

(一)

叙上屢述した如く、自己人生に一貫したる使命なき人々の世界は、狡智は益々對立し、尖銳化して、文字通りに弱肉強食、阿鼻叫喚地獄さながらの社會相を現出した、最早や宗教も道德も、このルツボの中に墮落してその本質も時々刻々として燃焼されつゝある觀がある。

この苦々しき世界、この哀れなる人類を救済するものは最早、神ながらなる日本の出現を俟たねばならぬ、皇國日本の本質を知らしめ、これを實踐躬行させる他はないのである。

而しながら我が日本の現状を顧る時、神ながらの日本を現代の日本の何れに求められるであらうか、日本現在の實狀は、混沌たる世界の一縮圖でありて、極めて腐敗し、極めて墮落し、澁滯してゐるのである。この苦々しき日本、この歎げかしき日本の、何れに於て世界の救世主たるその本質を求められるであらうか。

(二)

日に新に、日に進むは皇國日本の生命であり御民我等の本質である、今日の日本が思想に經濟に政治に外交に、如何に混沌として國運の進展を澁滯せしめてゐるやうとも、日本の本體、幽深神秘なる神ながらの國體の深淵なる本體より、たゆまず湧き出づる生々として清らかなる、生命の大奔流は、その混濁と一切の澁滯を淨化し進歩せしめつゝ、日に新に日に進みて、皇國日本々來の使命を世界の上に果しつゝある。

こゝに神國日本の尊さと有り難さがあるのである。

崇高にして神秘なる皇國日本の生命は、神と皇と民との三位一體即ちむすびに因りて、日に新に生成されつゝあるのである。

この皇國日本の生命に目醒る時、吾人は吾人の尊さに感激して、宗教に道德に外來思想に超越して、哀れなる世界人類の救世主たる皇國日本の爲めに盡さねばならぬ、自己自身の使命ある眞生命をハッキリ認識されるであらう。

(三)

この使命至上主義精神こそ、世界人類に卓越する日本民族特有の崇高なる魂である。この神秘なる魂を闡明せんとして、こゝに論究して觀る。科學的に哲學的に、客觀的に論理的に論述しなければ、歐米流の學問ある現代人に肯定させることは至難であるが、日本精神は絶對的主觀であり、信仰であり、信念であり、實行でありて、太古の昔より言擧げせざる實踐躬行の民族である、而して大宇宙大眞理大生命、神氣則日本精神を吾人の如き、無學文盲の、而も筋肉労働者であり、思索の余暇極めて尠き者の能論述される處でもないから、日本人らしく自己自身の人生觀を論述して、日本精神の一片鱗を傳へんと思ふのである。

四、皇國の大使命に目醒めて、日本人の人生觀を確立せよ

(一)

吾人日本人は、神の現存を信じ、大宇宙に於ける、顯幽大生命大眞理を認識して、その絶對を天之御中主大神と尊崇し信仰してゐる。

唯物史觀に立てる自然哲學は、生命發生の原因は「もの」と「もの」との複雑なる結合分解の作用を重複して、生成されたといふ觀念的、抽象的、假定的推測的理論を立て、而して一切の萬物を唯物

的に進化論的に辯證的に論理を組み立てゝゐる。

吾々日本人は科學を否定するのではない、然しながら科學に辨證されざる形而上に於ける實在を認識し、この實在が科學と合致してゐる事を知覺してゐるのである。

即ち生命の起源に於ける科學が示すものとの結合分解の作用を重複して、生命體は生成されたとはいふ假定と推測に對し、吾々日本人は天之御中主大神の神命にて、高御産巢日神、神産巢日神と尊稱する神々の、「むすび」の御作用によりて生命體は生成されたといふ事を確く信じ、かく認識してゐるのである。

科學の二元説に對して吾人は一元説である彼の假定に對して我は信仰である。彼の自然の征服に對して我は自然との融合である。彼の傲慢に對して我は敬虔である。

かくの如く、唯物主義歐米人と、吾々日本人との人生觀世界觀は、その出發點に於て、既に大なる相違がある。

(二)

神ながらなる日本精神研究者の爲めに、簡單ながら産巢日の解釋をなせば「むす」とは岩に苔がむす、或は鳥が卵をむす、等の意義を有し、「ひ」とは靈である。故に「むすび」とは「靈が結び」てこれを亦他動的に「むす」して助成したる意義をも含まれてゐるのである。

「たか」とは「たかひかり」を意味し、陽的意義を有してゐる。「かみ」とは「かくりみ」を意味し、陰的意義を有してゐる。

故に、陽的靈と陰的靈とが結びて、又これを神が「むしはぐくみそだてゝ」生命體は生成されたといふ日本民族最太古の御祖先は教へてゐるのである。

吾人はこの形而上に於ける實在を認識し、祖先の御教を確信して、ひたすらなる信仰に生き、而し

て一切の萬有を創造する力の源泉であるこの「高御産巢日神」「神産巢日神」の「むすび」の幽深神秘なる意義に透徹して、以て世界に卓越する日本精神の認識を確立せなければならぬ。

(三)

吾々日本人は、祖先を通じ、原始動物を通じて、原始微生物を通じて、その生命體の中に神の御作用を認識してゐる。而して大宇宙森羅万象一切の生命體の中核に、神の御精神を認識し、この御精神を天地開闢の大昔より、一貫して天津日嗣に継ぎ遊ばされて、世界人類の最中に高光りて君臨遊ばされた。現人神を畏れ多くも、「すめらみこと」即ち我皇國日本の天皇であらせられることを確信してゐるのである。

而して吾々日本人は、天地開闢の當初より天皇を扶翼して、天之御中主大神の御使命を天地の窮り無く、現世に果す爲めに、「おほみたから」として、生み成された事を知覺してゐるのである。

この自覺この信仰こそ、純正なる日本臣民の把持せる崇高なる魂である。

吾人のこの自覺、この認識、この信仰に立脚せる言説は、唯、吾人の獨斷を以てするものではない、吾人は祖先の言ひ継ぎ語り継ぎを、そのまゝに敬虔に遵奉してゐるのである。

(四)

吾人は吾人の言を立證する爲めに、こゝに少しく古事記に就いて註釋を加へて見る。

古事記神代の卷に、「國わか浮脂の如くにして、くらげなす漂へる時に、あしかびの萌へ騰れる物に因りて成りませる神の御名」宇麻志阿斯詞備比古遲神とある。吾人はこゝに心眼を開きて、この意義を省察せなければならぬ。

「國わか浮脂の如くにして、くらげなす漂へる時に」云々の言葉は、この地球が氣體より流動體となり、今や當に固體として進化せんとする時代である。即ち天地開闢の時を指しての謂ひであり、

又生命體が棲息するに漸く適する如くなつた時代を指してゐるのである。

而して「あしかびの萌へ騰れる」云々は、天と地との「むすび」の御作用をあらしめて諸々の生命體は、この地上に生成されたことを指してゐるのである。

而して「物に因りて成りませる神の御名」とは、その次の言葉に示す「うましあしかびひこじの神」の生成した原因を示してゐるのである、こゝに吾れ等よく留意せなければならぬ。

(五)

天地開闢の時に、神は「むすび」の御作用をあらしめて、諸々の生命體を生成遊ばされた。その諸々の生命體の中核に、「そのものによりて」神は現世に御出現遊ばされたのである。

「うまし」とは「美し」であり、「可し」といふ意義を有し、「あしかび」とは地上に芽生えたる諸々の物體といふ意義であり、「ひこじ」とは「靈子次」であり、即ち「日子」であり、神の御心を繼がせられる生命である。即ち神の子孫であるといふ意義である。「神」とは「隱身」であり、形而上に於ては天之御中主大神であり、形而下に於ては諸々の生命體の「頭」であり「上」である。

故に、宇麻志阿斯詞備比古遲神とは、『可いではないか、神の子孫たる俺が親の意志を繼ぎて、万物の神として、万物と共に現世に出現した』といふ意義深遠なる言靈であるのである。

(六)

即ち天地開闢の初めに、天之御中主大神は、諸々の命を以て、高御産巢日神、神御産巢日神に「むすび」の御作用をあらしめ、諸々の生命體の中核に、御子宇麻志阿斯詞備比古遲神を生成遊ばされて、修理固成の詔を言依し給ふたのである。

この主観この直覺この實感こそ、現人神として、全人類の最中に高光りて、君臨遊ばされた我が日本民族最太古の祖先、伊邪那岐命の御自覺であり、御信仰であつたのである。

然り、伊邪那岐命は、幽玄神秘なる天地大自然の神氣に觸れて、始めて人間としての自己に自覺されし時、「うましあしかびひこじの神」と感激極る言靈を發せられたのである。

(七)

我が日本民族は神の御裔である。然れども我れ等の祖先は人體そのまゝに天降りたのではない、神の創造し給はれし地上万有の生命體の中に、吾々の生命は天降りて、万有と共に生成化育され、今日の人間とまで進化發達したのである。

故に科學が示す如く、吾々人類は微分子の生命體より、進化した自然の創造する子であるとしても、吾々純正なる日本人の信仰は、その微分子たる生命體の中に、神の御意思を認識し、而して、天地開闢の當初より、「すめらみこと」を扶翼する「おほみたから」としてあしかびの如き原始時代より、仕へ奉りてゐることをハッキリ認識してゐるのである。

(八)

この信仰この實感こそ、實踐的日本人の最高峰思想である。

然り吾人日本人が生成されし原因及びその目的は、古事記神代の卷に説明し盡くされてゐる。唯吾人の信仰と學力とが、これを咀嚼し吸收し得る乎否乎の問題に拘はる處であつて古事記は精神的にも、科學的にも、その記載する神名によりて、明確にこれを指示してゐる。

吾人はこゝに學究的發表をなさんとする者ではない、然し乍ら日本人の人生觀を把握せしめる爲めには、今少しく古事記について、説明を加へる必要がある。

(九)

「天地初發の時」とは、此の地球が、流動體より、今や將に固體として化成されんとする時代であり、生命體の生存に適する如く、なつた時代である。即ち「國わか浮脂の如くにしてくらげなす漂

へる」時代である。

この時に高天原、即ち大宇宙の高御座にまします天之御中主大神は、高御産巢日神、神産巢日の兩神に命じて、「むすび」の御活動あらしめ、この地上に、一切の万物と共に、人間と成るべき生命體をもお産みになつた。即ち「あしかびの如くに萌騰れる物に因りて」宇麻志阿詞備比古遲神といふ、現人神と成るべき生命體を生成されたのである。

次に、天御中主大神は、天常立神、國之常立神、豊雲野神といふ三神に命じて、天之常立神には、この地球を圍繞する天体万象を司らしめ、國常立神には、地球上一切を司る神として任じ、而して豊雲野神には、天之御中主大神の御意志を繼ぎて、現人神として出現したる生命體及び一切の生物の進化發達を専ら擔任すべき事を命じたのである。

而して以下、字比地邇神、妹須比智邇神、角杵神、妹活杵神、意富斗能地神、妹大斗乃辨神、游母陀琉神、妹阿夜詞志古泥神、伊邪那岐神、妹伊邪那美神は「國わか浮脂の如くにしてくらげなす漂へる」時代より、万有は神々の加護によりて進化し發達して、大地は固成し、海陸は區分され、動植物は繁茂繁殖されて、人間は今日の如くその身體を整へ、大神の使命である修理固成の大業に奉仕するべき智恵を授かりし等、即ち地球上に於ける万物一切の進化發達の道程を、十柱の神々の言葉に依りて、説明し盡くされてゐるのである。

(十)

かくの如く、我等の祖先は、神の加護を受けて、原始動物より進化して、こゝに始めて現人神として、天之御中主大神の神意を繼承し、大經綸を行ふべき身體及び智徳を兼備するに至つた。

即ち我が日本民族最太古の祖先、伊邪那岐命、伊邪那美命は、天地大自然の神氣に觸れて、神の裔たる自己に自覺した時。於是天つ神諸々の命以ちて、伊邪那岐、伊邪那美命二柱の神に、此の漂へる

國を修理り固め成せと詔ごちて、天沼矛を賜ひて言依し賜ふたのである。

この直觀、この主觀こそ、我等の祖先が把持せし大思想大信仰大信念であり、この使命至上主義信念貫徹の爲めに、我等の祖先は「イザナ」「イザナ」と同胞を誘ひあひて、奮ひ起つたのである。

この使命至上主義信念の下に、我等の民族は自己生命適用の意義と價值とを、自覺したのである。かくて日本人の人生觀は確立されたのである。

即ち我等日本人はキリストの教へる如き罪の子ではない、釋迦の教へる如き、苦惱の世界に慢然と生れ來て、自己の哀れさに歎げき悲しむ者ではない。科學の示す、大自然の創造したる物質の子で、物質を追ふて、快樂の彼岸を眺めつゝ、世の中を呪咀する、哀れなる資本主義の産みたる惡魔の子でもない。

(十一)

我等日本人は神が生成化育したのである、根本的には神自身が御出現遊ばされてゐるのである。而して其の出生したる目的は、天地大宇宙一切萬象を開拓して、精神上物質上人類社會に貢献し、以て地上に高天原を建設するにある。

而して吾人等現代日本の臣民は、大神の御意思を相續する、畏れ多くも、現人神天皇に絶対絶命奉仕して、この混沌として腐敗墮落極りなき現人類社會の秩序を整へ、その生命の使命に目覺めて、光明ある世界に、偕に共に大使命を果さねばならぬのである。

この信仰この信念、この宇宙大自然の創造力神氣そのまゝの精神こそ、皇國日本の生命であり御民我れ等の本質である。

五、皇國日本肇國の本源を極めよ

(一)

吾人に生命あり、その一生を基調として生命適用の目的ある如く、我が皇國日本國家にも、永遠無窮の生命と使命があるのである。

この日本國家の生命と使命とを論述せんとする前に、先づ國家發生の本源を極めなければならぬ。日本國家發生の原因を、言語學、考古學、人類學、人類學等凡ゆる科學に立脚して、これを考察しても、その片鱗さへも掴むことは到底不可能とする如く、國家發生の原因は、荒涼草蒙なる最大古の大昔に、存してゐるのである。

故に吾人は、吾人が何時生成されしかを知らざる如く、唯父母の教示するまゝに、その過去の年月を以て、吾人の生成されし時と信づる如く、日本國家發生の原因及び、その時代も、祖先の教示するまゝに、これを信じなければならぬ。

故に我國家の古典に基きて、これを知るより他に途はないのである。

(二)

時は「國わか浮脂の如くにしてくらげなす漂へる」時代であつた。この漂へる國を修理固め成せ「人類に智識を授けて、その混沌たる生命に使命を與へて、神の命に奉仕せよ」といふ大神の詔りを受けた吾等の祖先伊邪那岐命、伊邪那美命の二尊は、天の浮橋に立して「神と人との界に立ちて」其の沼矛を「沌沌としてゐたが天地自然の神氣に觸れて、神の子孫たる「我」に自覺して」指し下して畫給へば「自覺の眞智を以て、土民の生活を觀察すれば」鹽許哀呂許呂邇畫鳴して「自我自儘の生活の爲めに、その集團生活は騒々しく」引上給ふ時に「故に沈思默想して、彼等の生活を省察する時に、」其の矛の未より垂落る鹽「その眞智の發する處」累積りて島と成る「遂に大使命大眞理大理想、大經綸を把握するに至つた」是游能恭呂島なり、其の島に天降りまして、「自己が御生れに成つた島を本

據として、」その島に天の御柱を見立て、八尋殿を見立て、天の下を知ろしめされたのである。

(三)

古事記はかくの如く、我日本民族最太古の祖先の御自覺及び使命をハッキリと語り繼いでゐるのである。

而して二尊はこの使命遂行の爲に自擬島を中心として、國生み神生みの大事業に着手遊ばされたのである。「國生み」とは島々を發見すると共に、その島に住する土民の中から、素直にして、智徳あり、修理固成の神業に奉仕さるべき、人々を選びてその島の司人「頭」として御任命あらせられたのである。

「神生み」とは、岐美二尊の、「うけひ」に依りて、産れ遊ばしたる皇御子を、その島の頭として、御定め遊ばされたのである。

即ち『御合ひまして御子淡路の穂之狹別の島を生み給ひき』とある如く、淡路の島を發見すると共に、その島に、皇子穂之狹別命を守護神と定め給ひて、祭政一本修理固成の、地方的自治的御任務を命せられたのである。

『次に伊豫之二名島を生み給ふ、此の島は身一つにして面四つあり、面ごとに名あり、故伊豫國を愛比賣といひ、讃岐國を飯依比古といひ、粟國を大宣都比賣といひ、土佐の國を建依別といふ』

即ち二名島とは四國のことであり、伊邪那岐命はこの島を發見すると共に、山脈によりてこれを四ヶ國に區分し、伊豫國には愛比賣命を頭と定め、讃岐國には飯依比古命を、粟國には大宣都比賣命を、土佐國には建依別命を、それ／＼その國の頭と定められたのである。

かくて二尊は、九州に對島に佐渡に中國に次々に國生み、神生みの大事業を行われ、こゝに日本國家の大基礎は築かれたのである。

(四)

かくて皇祖の御使命を継がせられ、天壤無窮の皇位に登らされた天照大神は、皇孫命瓊々杵命に、詔勅して、『豊葦原の千五百秋の瑞穂國は、是れ吾か子孫の天皇たる可きの地なり、宜く爾皇孫就而治焉、行矣、寶祚の隆えまさむこと、當に天壤と與に窮り無るべし』と、寶祚無窮の神勅と共に、その御使命を明徴する三種の御神器を御譲り給ふたのである。

畏れ恐みて拜察し奉るに、この御聖勅は、天津神の命を奉じて、修理固成の御經綸に奉仕し、遊ばされし諸冊二尊の御稜威に因る處は勿論であるが、天地自然の神則であり、神の御聲である事を知覺せねばならぬ。

(五)

こゝに天孫瓊々杵尊は皇祖皇宗肇國の御使命を嗣がせられ、未だまつろはざる醜草共を平けく安らげく、經綸の必要から、皇居を近江伊勢地方より、海路九州の地、高千穂、クシブルの峰に御移し遊ばされた。

而して彦火々出見命、鸕鷀草葺不合命代々この地に高天原を營まれ、天の下を知ろし召し給ふた。豊御毛沼命、即ち神武天皇に至つて、再び高天原は大和の國に移され給ひて、こゝに愈々皇國日本國家建國の大經綸は、その基礎を固められたのである。

(六)

こゝに一言を要し度きは、今日の如く歐米流の學問ある、智者學者の中には、動さずると我が古典をして、恰も諸外國の神話傳説と同一視して輕視する者がある、かくの如きは國體精神を冒瀆するも甚だしく、異端者たるの譏は免れぬ所である。

又、彼等の中には、唯物的先入思想に禍され、或は宗教的道德的學問信仰に誤られて、我が皇國日

本肇國の本義を知覺せざるのみか甚だしきは、我が原始時代の高天原を、或は中央亞細亞天山地方に求め、或はベルシヤ、アフガニスタン地方に求め、或は南洋に、支那大陸に、蒙古に、恰もその學究博識を誇る如く、人類學、人種學、言語學、考古學等科學上ありと凡ゆる資料に立脚して、剩慢不徹底極る駁辨を捏ね返して、而もその結論は、遂に有耶無耶として、朦朧的高天原の所在地さへも示されずに、青年學徒の國體觀を攪亂してゐる。

かくの如き歐米流の學者は更らなり、我が國學者と雖も、唯物的、科學的先入思想に支配されて、國體を論ずることは、神人共に宥ちれざる異端者である。

(七)

日本精神に立脚して觀る高天原は、大宇宙大真理、大生命大使命則天之御中主大神の御所在所であつて、形而下の高天原は、最太古の大昔より、代々天皇の高御座にまします所を、高天原と尊稱し奉つてゐるのである。

故に吾人がこゝに科學的に、如何なる學究を重ねても、何千年何萬年何十萬年の過去に遡りて、この地上に於ける人類の生活狀態を窮知する事は、不可能とする如く、神の經綸のまゝに、天地開闢と共に、豊葦原の瑞穂國を中心として、幾千萬年地上に點々として移動されし高天原を知らむとするこゝとは、古き譬へではあるが、木に依りて魚を求めよよりも、未だ迂遠なる事である。

即ち今日に於ける高天原は、世界的に觀れば皇國日本全土であり、八百萬の神々は、皇道精神を把握する御民我々同志である。

而して國家的に觀れば、現在では大東京市が高天原であり、東京市より觀れば、宮城内が高天原であるのである。歴史によれば、京都時代あり、奈良時代あり、桓原時代あり、九州時代あり、更らに遡れば中國時代あり、近江美濃伊勢時代あり、猶遠く過去に遡れば、瑞穂の國を本據として、神のま

に、經綸のまゝに、支那に蒙古に天山地方に、印度に南洋に其他に御移動遊ばされて、濛昧なる土民を啓發して、修理固成の御事業に、盡くされてゐるのである。

即ち日本書記通釋卷之二十二の中、神武天皇遷都の御詔勅と稱するものの中に「天祖の跡を降してより、以逮今に一百七十九萬二千四百七十餘歳、而して遼く遠かなる地、猶未だ王澤に霑はす、遂に邑に君あり、村に長あらしむ、各々自ら彊を分ち用て相凌ぎ轢る」とあらせられる。

天祖の跡を降してよりとは、天孫瓊々杵尊が、天照大神の御詔勅を奉じて、天壤無窮の皇位を嗣がせられ給ふてより、そして今日までに、百七十九萬二千四百七十餘年を経て來たと詔勅遊ばされたのである。

吾人は、神武天皇御聖勅のこの一節を深く思索せなければならぬ。太古の祖先等は一日を以て一年と計算せしか、或は又今日の如く、三百六十五日を以て一年と計算せしか、吾人はこれを知る由もない。

然し乍ら太古時運鴻荒草昧の時代一日を以て一年とせしか、或は又その他の記憶法を以て、一年と計算されしかは兎も角、大友義直の編輯する「上記」には、鶉葺草葺不合命第七十三代豊御毛沼命、即ち神武天皇と記述されてある處を觀れば、強ち根據なき年代の線方ではないのである。

吾人は「上記」に記述されてある處を、そのまゝに鶉呑みにすることは出来ぬが、我國家の風習は、昔より代々祖先の姓名を子孫が繼承してゐる家庭のある事實から觀て、鶉葺草葺不合命が、同一尊名にて七十二代相續されたとしたならば、その親父にあたらされる彦火々出見命は亦、同一尊名にて何十代かに、襲名され、天孫瓊々杵尊、亦何代何十代襲名相續されしか、これを推測するに難くはない。古事記に「故日子穗々手見命は高千穂の宮に五百あまり八十歳坐しき。御陵は即ちその高千穂の山の西の方に在り」とある。

かくの如く、同一尊名を以て、何代何十代何百代相承し相續されたならば、第一代天孫瓊々杵尊より神武天皇に至るまでの年數は、百七十九萬二千四百七十餘歳を経てゐると確信しなければならぬのである。

(八)

然り吾人は幾億千年の昔、天地開闢の時にこの地上に吾人の生命は生成されたのである、而して吾人の肉體は、幾百千万回の生滅流轉を繰り返して、今こゝに人間として、皇國の御民として、儼然とその生命は躍動してゐる如く、我が日本國家發生の原因は、天地開闢と同時にあり、國家建國の肇は、何万年何十萬年の昔なるか推測するも至難であるが、皇祖諸冊二尊の國生み神生みの御事業より、始めて、ゐるのである。

こゝに吾等が留意すべきは、天照大神を形而上の神となし、或は現人神としても、その御所在地を日本國土の外に求め、我等の祖先を恰も外來の移民族の如くに誤信する事は、實に國體の本義に蒙きも甚だしきといはねばならぬ。

即ち畏れ多くも、今上陛下には天津神としての天皇と、現人神としての天皇との、區別があらせられる。現人神としての天皇は、日本國土臣民の上に光臨され、九千萬臣民を率ひて、修理固成の大業を果すべく、皇國の國威を四海に布き、まつろはざる世界人類を平らげく安らげく、統治する大使命があり、天津神としての天皇は、天照大神であり、即天之御中王大神であり、太陽の如くにその御稜威は普く世界の上に赫きて、人類の福祉を増進し遊ばされてゐるのである。

即ち天照大神も、太古に於ける我等の天皇であらせられ、豊葦原瑞穗國を高天原として天の下を知らし召されし現人神であらせられた。天津神としての大神は、宇麻志阿斯詞備比古邇神即天之御中主大神であらせられるのである。

諸冊二尊におかせられても、かくの如く天津神としての活動あり、又現人神としての活動がある。天津神としての二尊は形而上の實在にて、天之御中主大神の詔勅奉拜して、天之浮橋を渡られた、即ち幽的神界より、顯的世界に天降りたる生命であり、大真理であり、大使命それ自體を指してゐるのである。古事記の記述する處を心讀すれば、その使命ある生命が地上に始めて天降りし地は、天之自凝島であり、それは日本國土全土を指しての謂ひである。

而してその使命ある生命は日本を中心に支那大陸に、亞米利加に、亞弗利加に、歐羅巴に、西比利亞に、全世界に渡られて、國生みの、神生みの、神業を行わせられたのである。

現人神としての諸冊二尊は、天津神二尊を本體とする人間的實在の神であり、天之自凝島を中心として、四國に九州に中國に、日本全土に國生み神生みの大業を経綸され、濛昧なる土民に生命に奉仕すべき自覺を與へしめて、優秀なる天孫民族と交合融和同化して、こゝに皇國日本の國體を生成すべき、肇國の大基礎を奠められたのである。

故に世界人類は、その人種の如何を問はずに、生命的には神の創造し給ふ處の同胞であり、我皇國日本國家は、生命的にも使命的にも、血統に於ても九千萬同胞則一體の大國體生命であることを認識せなければならぬ。

六、純眞清明、神氣其のまゝの日本人的國家觀

(一)

我等日本人の生命は、天地開闢と共に、神の生成し給ふ處であり、それは宇麻志阿斯詞備比古遲神と尊稱する、神人同一體の生命であり、換言すれば靈肉一如の絶對的使命ある生命體である。

我等日本民族生命の伸展は、この元を本として立て秩序の下に、修理固成の大使命を果たすべく、

日に新に日に進みて、彌廣に彌榮に、今日の如く、皇威四海に赫く、いとも崇高なる皇國日本を生成したのである。

故に今日の吾々國民個々人の生命は、畏れ多くも「すめらみこと」を中核として生成化育され給ふ處の生命の延長であり、擴大であるのである。

故に吾々國民個々人の生命は、「すめらみこと」を中核としての神の「分靈」であると共に、時間的歴史的連續的聯繫的連帶的全體的永遠不滅の生命であるのである。

(二)

今日の現實界に生活する國民個々人の生命は、國家的民族的生命の大伸展に於ける、時間と空間とを一貫せる歴史的記録中の一空間的存在である。

この空間的存在の「我」は、聯繫的、連帶的に民族生命に歸一して、民族的、全體的「我」である。即ち全體的民族生命、則、國體生命と稱するものである。

我が皇國日本が、一旦緩急ある場合、偉大なる威力を發揮する所以は、この國體生命の躍動に因るのである。その躍動する所以は即ち、國體則天皇であり、天皇則神であるからである。

正則に説明すれば、神則天皇であり、天皇則國體であり、國體則民族全體生命であるのである。故に吾々國民個々人の生命は實に尊ぶときのものである。

神と皇と民との三位一體の生命を、皇國日本と稱するのである。

(三)

此の故に神の心は天皇の心であり、天皇の大御心は國體の心であり、國體の心は國民吾々の心である。

即ち愛國の心は、天皇に忠節を盡くし、神を敬することゝなるのである。換言すれば神を敬せず天

皇を尊崇せずして國家を愛するなご言ふ事は、あり得ないこと、なるのである、故に日本に於ては國體に忠誠なる者でなければ忠とは言へぬのである、隨て日本に於ては忠を百行の本と云はねばならぬ。かくの如く、天地開闢の當所より神意を相續し、祖先を通じて一貫せる生命の中核に儼存せる使命至上精神に立脚して、實踐躬行することを神ながらの道と稱する。この精神を畏れ多くも天皇におかせられては、大御心と申し上げ、國體に於ては日本精神と稱し、吾々國民相互間に於ては正氣精神と稱することが最も適當である、即ち天地正大の氣と融合し生活することが日本人の精神である。天皇と國家と國民、この元を本として立てる儼然たる秩序の中に、神氣融合せる三位一體「むすび」の心こそ、全世界に卓越せる皇道日本の生命であり、姿である。この清き尊とき、神國日本の崇高なる姿を認識しなければ千萬言國體を論じても無駄である。

(四)

この原理を認識させる爲めに、今日の日本國家を一本の櫻の木に譬へてみる。この櫻木には今日九千万といふ尨大なる櫻花が、咲き亂れてゐる。この九千萬といふ個々の櫻花は、各々の生命を維持してその目的を果さんとして居る。

我等九千萬同胞にもこの櫻花の如く儼然として一貫せる、修理固成といふ自己に與へられてゐる先天的使命があるのである。即ち政治家は政治の立場から、その本分を盡くして、國家といふ大樹を培はねばならぬ、軍人に、農民に、労働者に、官吏に、教員に、商人に何れの立場からでも、國民たる以上、自己の本分を盡くして、國家に貢献する事がその目的でなければならぬ。

(五)

即ち個々の櫻花が、一本の櫻樹の大使命を分擔して、各自々々その使命を果しつつある如く、吾人國民も、皇國日本の大使命を分擔して、各自々々にその使命を果たさねばならぬ。

櫻花がその生命を小枝から大枝を通じ、幹より相續し發生してゐる如く、吾等國民はその生命を父母より祖父母、曾祖父母を通じて民族といふ大國體生命より相續し、生活してゐるのである。

櫻樹が、何十年何百年前には、双葉であり又その双葉は、一粒の實より生長された如く我日本民族は、神の降された一粒の實より、双葉を生じて年と共に幹は伸び、枝葉を生じて、この間幾千萬年幾億年の歲月、櫻花が咲きては散り、散りては咲いて實を結び、根を培ひ、幹を太らして來た如く、我が民族も、生れては死し、生れては死にして、皇國日本といふ幹を培ひ、皇威といふ偉大なる使命を四海に赫やかして、彌廣に彌榮に榮えて來たのである。

櫻花は散りても、その生命は實となりて、櫻木に残す如く、吾々日本人は、死してその骸は大地に還すとも、その生命は國體といふ大生命體に歸納し、融合されて又新らしき生命として顯現し伸展してゐるのである。

櫻花と櫻樹とが、その生命を一體とせる如く、我々國民も國體と其の生命を一體としてゐるのである。信仰的にも科學的にも、國體を離れての自己といふ事は、皇國日本國家國民にはあり得ないのである。

(六)

櫻花はその生命を根より培はれてゐる。我が皇國日本は、その生命を神より培はれてゐる、故に國體生命は天皇であり、幹は皇室であり、大枝小枝は民室であり、櫻花は吾々國民同胞であることをハッキリ認識せなければならぬ。

故に神則天皇であり、天皇則國體であり、國體則九十萬同胞であると論述した所以である。叙上の如く國家と吾々國民とは、靈肉一如身心不二の同一體生命である事を自覺したならば、神の

心を以て己れの心とし、天皇の大御心を以て己れの心とし、九千萬同胞の心を以て己の心として、各自々々その立場々々から、本分を盡して皇威を普く四海に赫かすことに努めねばならぬ。

即ち萬邦無比の光輝ある我日本國家構成の諸機構、政治に經濟に産業に教育に國防に、その他あらゆる施設は、この元を本をして立て秩序の下に、天地大自然神氣融合せる大家族主義の中に、只一人の飢へる者、只一人の疾病に苦しむ者、只一人の不逞なる思想を懐く者を無からしめて、國家を擧げて祭政一本の世界的大使命に奉仕することこそ、皇國日本の眞の姿であるのである。

七、天佑を祈りてこの難關を突破せよ

(一)

國家の現状は、思想に政治に經濟に産業に、一切を擧げて支離滅裂であり、紛糾錯綜極りなく、恰も世界諸民族の殖民地の如き觀を呈して、皇國日本の眞の姿は、今日の日本の何れにも見出す事は出来ぬ。

畏れ多くも、天皇の御威徳は、天の叢雲の如き禍津醜思想の存在に遮られて、蓋し六合には妖雲低迷し、百鬼その影を没せずといふ、極めて歎げかはしき修羅の巷と化してゐる。

而して日本四圍の情勢を観れば、禍津國の醜草共は、皇國のこの嘘隙に乗じて、魔の手は益々露骨に動き、最早や戦争？屈辱？二途何れを撰ぶ？皇國の採るべき道は、現代の政治家のみには任せられざる極めて危険なる國情に直面してゐるのである。

戦争は不可避の問題として、我が皇國の現状は、現在の如き彌縫的姑息なる改善を以て推移せんか、その戦争を契機として、多年鬱積されたる國民の忿懣は、那邊に向つて爆發されるであらうか。

如何に自由主義、平和主義、國際主義、爲政者が、彼のロンドン條約の如き、耳を覆ふて鈴を盗むか如

く、再び屈辱外交を繰返して戦争を回避しても、日本現在の國民意識形態は最早や爲政者の欺瞞懐柔の策には乗せざるの状態となつてゐるのである。

こゝに皇國日本の、非常時の超非常時代たる以所の重大性は孕まれてゐる。かくの如く内治外交共に、重苦るしく憂鬱なる氣流は、日と共に益々壓迫しつゝありて、國家は恰も噴火山上に在る如く、極めて危険に、極めて不安なる事態に直面してゐるのである。

(二)

さらには如何なる方策を樹て、この難關を突破するか、最早、吾人は天皇輔弼の重臣諸士に、依頼することは出来ぬ。現代の政治家にこの國難を突破する、回天の大經綸大英斷を求むる事は出来ぬ。

残されたる問題は、國民大衆の奮起にあり、即ち一切の外來思想を解消して、皇國日本精神に目醒めるにあり、忠君愛國の至誠に燃えて、決死殉國の精神を固めるにあり、天地神明に誓ひて、日本國家大改造の爲めに、團結するにあり。

然りこの至誠、この力を以てするより他にこの墮落腐敗して、疾膏盲を侵せる日本を淨化更生せしめ、對外的國難を突破するの道は他には絶對に求められぬのである。

(三)

國家未曾有の超非常時に際して、回天の大經綸大英斷を以て、大改造の責任を負ふ者は、勿論青年國民大衆である。純正なる皇國日本の血統を繼ぎたる青年は、自己の血潮に自覺して、世界に卓越せる皇國日本の大思想を把握して、一君萬民の名實共に伴ふ大家族主義皇國日本國家建設の爲めに、慕進しなければならぬ。

農村問題、勞働問題等も重大なる問題に相違はない、而しながら、將來の日本を背負ふ青年はかくの如き枝葉的問題は、唯物主義、個人主義、利己主義、自由主義に歪曲されて、皇國を本日の如くに

行詰らせた、當面の責任者たる、老年中年の國民大衆と、政府當局との交渉に任せて、純正なる日本青年は、高處大所に立脚して、自己自身の思想と生活を改善すると共に全體的國家大改造に向つて奮進せなければならぬ。

(四)

さらば青年よ團結せよ……………

ひたすらなる敬神尊皇愛國の精神を固めて天地神明に誓ひ、同志を糾合するにあり。

秋は將に三十五六年の國難を眼前に控えてゐる。眠れる獅子は目を醒せ、「海行かば水づく屍、山行かば草むす屍、大君の邊にこそ死なめ、願はせじ」を金科玉條として、輕舉妄動を慎み、責任を省みて、國體の本義を明徴し、國民思想の統一に絶對絶命の力を注ぎ、この國體協同精神の基礎の上に、昭和維新樹立の誓願を仰がなければならぬ。

この純眞清明なる祈願、この只管なる同志の「むすび」にこそ天佑は降下されて。

畏れ多くも天皇の御威徳は、至公至平に國家萬民の上に光澤され、こゝに政治に經濟に産業に教育に國家百般の施設に徹底的大改革は遂行され名實共に伴ふ大家族主義日本國家は建直されるのである

(五)

さらば天佑とは何？、天佑とは神の加護であり、神が國民の祈願を嘉納されることである、即ち超人爲的不可思議なる事象が現はれて國民の希望を達成されることである。

天佑は如何にすれば發動される？、天佑は吾等國民同胞のひたすらなる「むすび」只管なる祈願、只管なる實踐躬行に因りて發動されるのである、即ち純眞なる國民の一致團結、皇國の爲に、子孫臣民の爲に昭和維新を樹立せんとする赤誠の結晶と、これを貫徹せんとして工作する努力の蓄積に因るのである。

神と皇と民と三位一體「むすび」に因りてこそ、こゝに天佑は發動されるのである。

(六)

日本人的自覺ある青年は、その思索その認識を今一步進めて「ミコト」の意識に目醒めねばならぬ、「ミコト」とは何？「ミコト」とは「命」でありイノチである、自己自身の使命ある魂の本体である、「尊」であるタフトシである、人類に卓越する日本人の崇高なる魂である。

「美事」である、ウルハシキである、眞善美を把持せる思想と行爲とである、「見事」であるミゴトである、立派なる人格を具備する皇國の御民である。

畏れ多くも天皇陛下は「オホミコト」であらせられ、陛下の一言一行は、これ皆「オホミコト」の發動であり、神の御言葉であり、神の御行事であらせらる。

故に日本人的自覺ある青年は「修理固成」の使命ある自己自身の「ミコト」の至崇至尊なるその本質に目醒めて、これを基調として美事なる思想を涵養し、見事なる生活を營みて皇國の御民として名實共に伴ふその本分を果たさねばならぬ。

かくの如き言行一致する實踐的日本人の團結力、かくの如き人々の祈願と運動に基きてこそ未曾有の超非常時皇國の難關は突破されるのである。

八、結 言

(一)

鬭争の本体を惡魔と觀れば平和の本体は神である、世界は神と惡魔との交錯したる矛盾の中に、快樂と苦惱とを交織しつゝ、世界平和を望みて工作し努力しつゝあることは認めなければならぬ。

ゼネブアの世界聯盟會議然り、ロンドン海軍々縮會議亦然り、然れども混沌として、その生命に使

命を有せざる世界は、武力闘争に代はるに經濟戰を展開した、各國はその覇權を握らむとして今や鬪戰の世界的白熱戰を現出した。

經濟戰の次ぎに來たるものは何か、言ふまでもなく武力闘争であらねばならぬ、世界は口に平和を高唱しつゝ、その實軍備の充實に急いでゐる、この矛盾この撞著こそ混沌として光明なき世界人の心である。

燦爛たる科學の前には宗教はその光を蔽はれ、飽くなき享樂と優越を追ふ利那主義の前には倫理も道德もその影を没しられ、最早世界の何處を見ても常闇であり、人類を救濟すべき何ものも残つては居らない。

(二)

光は東の海より上る黎明の鐘は極東日本より告げられた、今や皇國は神ながらなるその本質に自覺して濛昧なる世界聯盟より超脱し、全世界の前に、いと神々しく巍然として出現したのである。

皇國の世界的本格的使命工作は今日を以て開始された、滿州國建國助成則ち是れであり、東亞の聯盟工作則ち是れを基調としてゐるのである。

かくの如く今や日本は前途に横はる幾多の障礙幾多の難關を突破して、混沌とする全世界を匡救せんとして工作してゐるのである。故に吾人國民は皇國のこの大使命に日醒めて、誤まれる自己の先入思想を是正し、その生活を改善して、皇國の御民としての本分を盡さねばならぬ。

この國体の使命と個人の使命とを融和一致させる爲にその障礙たる外つ國的諸々の魂を是正し淨化して皇國魂に歸一し統一して、而して經濟的にも維新の御遂行を仰がねばならぬと主張してゐるのである。

(三)

先ず吾人日本人は何はともあれ世界的社會的鯁鉾立の思想より改めねばならぬ、儼然として實在する天之御中主大神、則天照大神を信仰せねばならぬ、神の御意志を直覺せなければならぬ、今こゝに吾人は古事記を心讀し天地大自然の神氣に觸れて直覺せし神の御意志を開陳して誤まれる思想を懐く人々の思索に提供する。

『神は人間を造ると共に萬物に卓越せる眞智を授けて神同然となし世界の混沌を整へることを命じた』

◎人間は神より授かりし智恵を自己の快樂を求めるのみに逆用して人間社會を混濁させ、遂に獸類社會の如くに墮落させるに至つた。

『神は人間に神の命に奉仕することを命ずると共に、萬物は人間に奉仕することゝ定めた』

◎人間は神に奉仕する事を忘れた、故に萬物は人間の欲するまゝに恵まれざることゝなつた。

『神は人間に勞働の愉悅を覺らしめて地上に高天原を營むことを約束された』

◎人間は勞働の苦惱を覺えて、これを回避し、人間は人間を搾取して享樂と優越を追ひ、遂に地上を地獄とした。而して死滅しても天國や極樂に生れ更はらんとする慾望を懐いてゐる。

『神は人間に天地大自然の美に樂しませ、その健康を保ちて、智徳を啓發し人間社會を美化することを教へた』

◎人間は文明といふ燦爛たる形の物を勞作して、而してその不自然の美に憧れ、その情操は下劣となり、身体は病弱となりて、自己と社會とを毒するに至つた。

『神は勤勞する人々を慰ふことゝ定めた』

◎人間は徒食遊食することを慰ふこととしてゐる。

(四)

かくの如く神意に反して、一事一物悉く智恵を逆用する人間社會の實相は實に苦々しく歎けかほしく哀れなる有様である。

最早この狡智に目醒る人間の前には宗教も道德も何等の力をもなさないのである、勿論社會主義的に人間社會の環境を改造してこれを匡救せんとしても、個々人が神の授け給はれし智恵を逆用することを放棄せざる限り、その目的達成は絶對不可能であらねばならぬ。

故にこゝに残されたる唯一無二の救世主は世界的にも日本的にも、純真清明神氣廣大無邊惟神日本道を宣揚し普及し顯現して、個々人の精神に日本人的信仰を把握せしむるにあり、即ち天地大自然の眞理に觸れしめて、その歪曲されたる狡智を常道に復固せしむるにあり、最早これ以上に誤まれる國民大衆を匡救し、世界人類を匡救するの道は絶對にないと思ふのである。

(五)

こゝに敬神尊皇愛國の至誠に燃る同志は吾人の提唱する、昭和維新は精神維新からの標語を高唱されると共に、國民思想統一の基礎の上に昭和新維を樹立し、而して對外的には日本國家の政治的經濟的思想的外交工作によりて、この行詰れる世界人類の思想的經濟的混沌を打開し是正して人類の魂に至崇至高なる希望と光明とを與へられむことを希冀するのである。

何はともあれ、昭和維新は精神維新からであり、吾々國民が皇國の御民として、名實共に目醒る事が第一義であり、而して第二義的に經濟維新も自覺と同時に遂行して、來たるべき對外的大國難を突破せなければならぬと主張するのである。

(終)

昭和九年十月十五日印刷

昭和九年十月廿七日發行

横濱市鶴見區潮田町一八三八

發行人 松 本 三 平

(號 介 山)

東京市深川區佐賀町一ノ六

印刷人 奥 村 裕 一

横濱市鶴見區潮田町一八三八

發行所 日本精神宣揚團出版部

非 賣 品



